

JASE

現代性教育 研究ジャーナル

MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY

2021 年

No. 118

2021年1月15日(毎月15日)発行

日本性教育協会

THE JAPANESE
ASSOCIATION
FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL https://www.jase.faje.or.jp 発行人 石川哲也 編集人 中山博邦
© JASE. 2021 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

テーマが「性」でも対応できる

臨床心理士／公認心理師をどう育てるか……………1

国際学会と日本性教育協会(JASE)……………7

「ありのままのわたしを生きる」ために・その後⑤……………10

思いこみのめがね③④……………11

多様な性のゆくえ④⑤……………12

今月のブックガイド……………13

JASEインフォメーション……………14

テーマが「性」でも対応できる 臨床心理士／公認心理師をどう育てるか

明治大学文学部准教授(心理社会学科臨床心理学専攻) 佐々木 掌子

はじめに

性教育や性のカウンセリング、性の臨床にかかわる人々が痛感している課題の一つとして「それを行う専門職が育っていない」ということが挙げられると思われる。少なくとも筆者は短い臨床心理士人生の中でそのような思いをずっと抱えていた。性のカウンセリングを行う大学院を探した学部生時代、そのような研究室は見つけられなかったし、現場に出てからも研修やスーパーヴィジョン(対人援助職の継続的面接指導制度)の機会は非常に限られていた。

2018年、明治大学に着任し、後進を育てる立場になると、何をどう教育すればよいのか悩むことになる。修士課程は2年間。この中で、知識と意識を根付かせ、理論と実践を両立させて学ぶ場とすることの難しさを今は痛感している。

本稿では、臨床心理士／公認心理師養成大学院での教育を綴るが、こうした悩みは、性の臨床に関わる医

療関係者不足の問題や、性教育を行う人材育成にも共通するところがあるのではないかと考え、共有させていただきたい。

臨床心理士／公認心理師とは

1988年から始まった臨床心理士資格は、指定された大学院を修了し、認定試験に合格してから登録される民間資格である。しばしば臨床心理士は、「カウンセラー」と言われるが、その業務は、①臨床心理査定、②臨床心理面接、③臨床心理的地域援助、④上記①～③に関する調査・研究とされており、ひらたく言うと「臨床心理学の知識を作ったり使ったりして支援をする人の資格」である。

学部で4年間心理学を学び、修士2年間で臨床心理学を修めるというルートでこの資格を取る人がほとんどではあるものの、なかには心理学以外の学部を卒業したあと、修士課程でのみ臨床心理学を修めるという有資格者もいたため、臨床心理士としての心理学の素

養が一様ではないことへの批判もあり、そこから遅れること30年後の2018年から始まった国家資格である公認心理師の受験要件には、学部で心理学を修める義務が生じることになった。

臨床心理士と公認心理師の違いについては、識者がさまざま論じている。臨床心理士は心理療法と研究活動に力を入れる上位資格であり、公認心理師は基礎系心理学をベースにした汎用資格だと差別化を図ろうとする流れもある。とはいえ、その違いが顕著になるのか、なくなっていくのかはまったく予測がつかない。心理職のユーザーを混乱させてしまうことになるが、業界自体がまだ定まっていない状況にあるのである。そして、本学では、臨床心理士も公認心理師も取得可能であり、この違いを大きく際立たせて教育をしているわけではないため、本稿ではこの二つを別々に捉えずに「心理士／師」を養成するという立場で記していく。

養成課程では、性の臨床教育をされているのか

表1は、公認心理師の所轄である文部科学省と厚生労働省が発表した公認心理師のカリキュラムである。想定される臨床現場としては、大まかに「医療」、「福祉」、「教育」、「司法・犯罪」、「産業・組織」の5領域で、

どの領域を取ってみても、性が関わらない領域はない。臨床領域だけではなく、科目群をみてみても、ほとんどのテキストに性をテーマとした章が入っていても不思議ではない。

それでは、実際にはどの程度、教育がなされているのだろうか。杉山(2019)^{註1}は、臨床心理士養成大学院すべてにあたる168校にアンケート用紙を送付し、その実態を明らかにした。それによるとまず168校のうちアンケートに回答した大学院はたったの17校。回答率10.1%の極めて低い数値である。医学部産婦人科の回答率39.0%や看護学科34.1%と比べても如実に低く、医学部精神科の19.5%と比べても、その「調査協力低姿勢」ぶりは顕著だ。

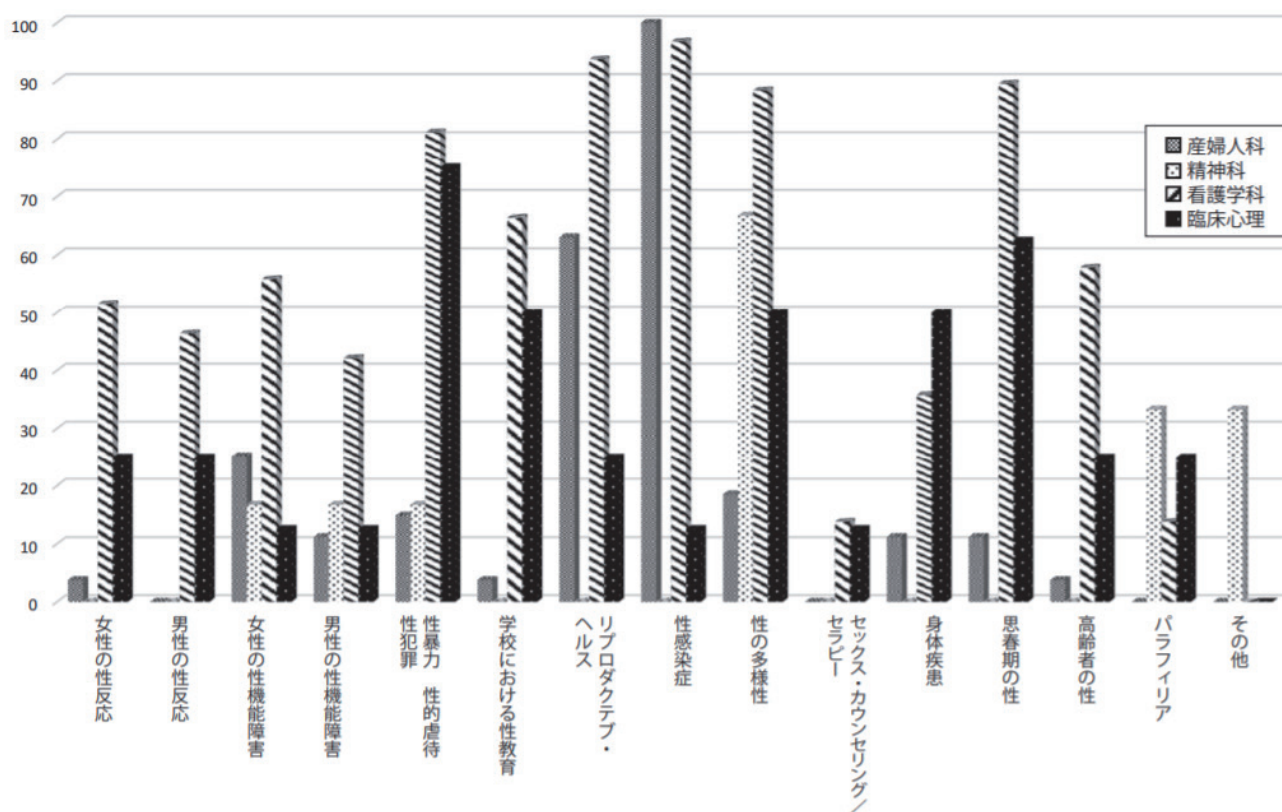
17校のうち「性科学に関する講義・実習・ゼミのいずれかあり」と回答した大学院は44.4%とのことだが、この数値に加えリアリティを感じさせるのが回答率10.1%だろう。もしも回答していない大学院が、まったく性科学の教育をしていなかったとしたら、養成大学院のうち4～5%程度しか性科学を教えていないことになる。そして、その数値のほうがより実態に近いように思うのだ。

性科学の教育を実施している各養成機関の講義内容の割合について図1^{註1}(次ページ)に示す。黒棒が臨床心理士養成大学院である。比較的多い講義内容としては「性暴力・性的虐待・性犯罪」と「思春期の性」のよ

表1 到達目標の項目、大学及び大学院における必要な科目について

到達目標	大学における必要な科目	大学院における必要な科目
1. 公認心理師としての職責の自覚 2. 問題解決能力と生涯学習 3. 多職種連携・地域連携 4. 心理学・臨床心理学の全体像 5. 心理学における研究 6. 心理学に関する実験 7. 知覚及び認知 8. 学習及び言語 9. 感情及び人格 10. 脳・神経の働き 11. 社会及び集団に関する心理学 12. 発達 13. 障害者(児)の心理学 14. 心理状態の観察及び結果の分析 15. 心理に関する支援(相談、助言、指導その他の援助) 16. 健康・医療に関する心理学 17. 福祉に関する心理学 18. 教育に関する心理学 19. 司法・犯罪に関する心理学 20. 産業・組織に関する心理学 21. 人体の構造と機能及び疾病 22. 精神疾患とその治療 23. 各分野の関係法規 24. その他	1. 公認心理師の職責 2. 心理学概論 3. 臨床心理学概論 4. 心理学研究法 5. 心理学統計法 6. 心理学実験 7. 知覚・認知心理学 8. 学習・言語心理学 9. 感情・人格心理学 10. 神経・生理心理学 11. 社会・集団・家族心理学 12. 発達心理学 13. 障害者(児)心理学 14. 心理的アセスメント 15. 心理学的支援法 16. 健康・医療心理学 17. 福祉心理学 18. 教育・学校心理学 19. 司法・犯罪心理学 20. 産業・組織心理学 21. 人体の構造と機能及び疾病 22. 精神疾患とその治療 23. 関係行政論 24. 心理演習 25. 心理実習(80時間以上)	1. 保健医療分野に関する理論と支援の展開 2. 福祉分野に関する理論と支援の展開 3. 教育分野に関する理論と支援の展開 4. 司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開 5. 産業・労働分野に関する理論と支援の展開 6. 心理的アセスメントに関する理論と実践 7. 心理支援に関する理論と実践 8. 家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践 9. 心の健康教育に関する理論と実践 10. 心理実践実習(450時間以上)

図1 各養成機関の講義内容の割合（※泌尿器科は先行研究があるためこの調査では割愛されている）



うだ。将来、精神科の心理士／師として、あるいはスクールカウンセラーとして働く人が多いためにトピックとして挙げられやすいのだろう。一方で、「カウンセリング」の専門職養成機関であるにもかかわらず、セックス・カウンセリング／セラピーを教育する大学院は1割程度に留まっている。調査回答率と併せて考えると、看護学科のほうがよりカウンセリングやセラピーについての教育を行っている状況だといえるだろう。

明治大学大学院授業での性の臨床教育

性の授業を大学院で受けたことのない筆者は、モデルとなる授業を知らない。試行錯誤の日々である。そこで、この3年間、どのような性に関する臨床教育を本学で行ってきたのか報告し、考えていきたい。

初年度から修士課程の授業で受け持つことになった「臨床心理学特論B」という授業の全13回はすべて性をテーマにしようと考えた。初年度の院生は全部で7名。講義としては、性科学の歴史や概略、そしてセックス・カウンセリング総論を取り扱い、それ以降は、筆者が提示した英語論文と架空事例に対して担当院生が発表し、その後ディスカッションするという形

式で行った。どこまで院生たちが関心を持って取り組んでくれるか手探りだったのだが、初回テーマの「勃起障害」を担当した院生が、セックス・セラピーにおける行動療法の基本である「感覚集中訓練 (Sensate Focus Technique)」をコーネル大学のウェブサイトから見つけてきて紹介をしたので、筋のいい情報を探し当てることのできる力量に「さすが」と感心したのを思い出す (コーネル大学は、セックス・セラピーで著名な Helen Singer Kaplan 氏がかつて教鞭をとっていた大学で、現在も Sexual Medicine Program を有す)。

そのほか取り扱ったテーマは、挿入障害、性依存、不育症、小児の性別違和、性的指向、小児性愛障害であった。初年度は、19時から20時40分までの授業時間内では収まらず、21時を過ぎてしまい、警備員さんに注意をされてしまうほど、毎回議論が白熱した。

少し具体的に授業内容を紹介しよう。性的指向についての回では、筆者もレクチャーを拝聴したことのある Anneliese A. Singh 氏の書いた Using Relational-Cultural Theory in LGBTQQ Counseling: Addressing Heterosexism and Enhancing Relational Competencies を課題論文とした。

来談経路：

あなたが臨床心理士として勤務する学生相談のケース。以下は、インターカーによる情報。

家族構成：

女子学生（21 歳）、私立大学文学部英文学科 3 年、母（52 歳）会社員

主訴：

母が自分に彼女がいることを知ってしまい、睡眠不足になって心療内科に通うようになってしまった。罪悪感でどうすればいいのかわからない。

経過：

東京都出生。周産期、乳幼児期と特記事項なし。地元の私立幼稚園、公立小学校・中学校を経て、地元の公立高校に入学。指定校推薦で大学入学をするため高校は真面目に通い、現在の大学に入学。

母親と二人暮らし。中学 2 年時、父母が離婚。「やっぱり」という感じ。父親は自分にもすぐに指図をするような威圧的な人で親しみは感じず、会えなくなることで寂しいという感情はわかenかった。離婚後、数回会ったが、何も話すことがなくて困った。大学入学後は会っていない。

翻訳の仕事をする母親とは気が合い、自分も英語圏の文化に興味をわいて将来は英語を使った仕事ができればと思っている。なんでも話す仲。海外事情にも詳しい母なので、LGBT のこと等も知ってはいたようだ。

今の彼女とは、大学 2 年の時に LGBT のインカレサークルで出会った。高校生の時に男性と付き合ったことがあったが、あんまり楽しくなくて女の子というほうがずっとよかった。レズビアンかどうかと言われると何とも言えない。これから男性を好きになることもあるかもしれない。男の子と付き合っているときは母に言っていたが今の彼女と付き合っていることは言えなかった。バレたのはテーブルに置いておいたスマートフォンの SNS 画面表示を見られたから。いい機会だと思って実は彼女がいると話した。理解してくれるだろうと思い込んでいたのに、驚かれた上に泣き出された。それから「でも若いから今だけでしょう？」とか「男の子と付き合っていたじゃない」とか責めるような言い方をしてきたので、頭に来て家を飛び出して彼女の家に住み始めた。

彼女は、すでに社会人になっていて、一人暮らし。外資系企業でコンサルタントの仕事をしている。頭が良くてキレイで自分なんかでいいのかなという引け目がちょっとある。最初は「お母さんにちゃんと認めてもらおうよ」と彼女も言っていたが、母から来た LINE を読んで「今は難しいね」と彼女にも言われ、そのまま 2 週間が経った。母が仕事に出ている日中に必要な荷物を彼女の家に運び込んで、彼女の家から大学に通っている。

LINE で「あなたが社会でつらい思いをするような選択をする育て方をしたことが本当に申し訳ない。あなたを男性嫌いに育ててしまったことについて責任を感じる。あなたが昔みたいになどにも生き方ができるように私も努力する」と送ってきた。

母は、心療内科でカウンセリングを受けて、自分を“まともな生き方”ができるようにしようとしているみたいなのだが、本当にカウンセリングでそういうことはできるのか？もしそうなら自分も男性を好きになることがあるかもしれないし、カウンセリングを受けてみたいと思った。

大学の友人には、自分のセクシュアリティは誰にも話していない。二人くらいレズビアン of 友人がいてこのことを話したら、「昔、ゲイに電気ショック与えたけど変わんなかったらしいよ、無理だよ」とか「でも女のセクシュアリティって変わりやすいくない？」とかいう子もいて、なんだかわからなくなった。

上記は、実際授業で使用した架空のケースである。

このケースについて、どのような見立てをするか、考えられる対応は何か、初回面接での目標などを考えてきてもらい、Singh 氏の論文をもとに、院生同士でディスカッションをした。このテーマを担当した院生は「調べていくうちに、どんどん興味がわいた」と性の相談への関心をもってくれたようだった。

2 年目は、院生の人数が 12 名と多くなったため、

扱えるテーマが増え、初年度のテーマに加え、性的サディズム障害、性被害、セックスワーク、HIV／AIDS についても、課題英語論文と架空事例というセットで提示し、取り扱った。

また、この年は、「担当のクライアントに恋愛・性愛の感情がわいた場合、心理士／師としてどう対応するか」ということも考えてもらった。こうしたテーマについて他者の前で言語化することで、各々のスタン

スの異なりが見えることがあり、こうしたディスカッションは心理士／師の卵にとって必要な体験ではないかと思われた。

そして今年度はコロナ禍での授業である。Zoomによるリアルタイム配信授業というこれまでとは異なる距離感で行われた授業は、4名という非常に少ない人数で行われたため、1年目、2年目ともまた違う学びの雰囲気であった。この4名は全員が課題論文をかなりしっかりと読み込んでくる上に、派生して調べてくる内容も、量・質ともにずっしりと重い人たちで、例年以上に筆者自身が深く学ぶことになった。「院生から教えてもらえる時間」という意識で、筆者自身が毎週楽しみに聞くという充実した時間だった。

そして、3年目にして思うのは、決してジェンダーやセクシュアリティを学びたくて本学に入学したわけではない院生たちも熱心に取り組んでくれたのは、面白さ(interesting)と重要性を感じることができたからではないか、ということである。きっかけもなく、ましてや「特別な領域」だと思われてきただけのことで、本来は学びたい、取り組みたいと思うテーマなのではないかと思うのである。ある院生は、「DSM(精神疾患の分類マニュアル本であり、心理士／師にとっては必須のテキスト)は読み込んでいたつもりでも、性の領域は見えていなかったことが分かった」と言ってくれた。

しかし、この授業は半期間で終わる。今後系統的に性を学ぶ機会は相当に意識をしないと訪れることはないだろう。本稿冒頭で「知識と意識を根付かせ、理論と実践を両立させて学ぶ場とすることの難しさ」と書いた。ほとんどの院生にとってはそういう場になれていないという反省があるのだが、そのようになり得たのではないかと思えた院生について紹介したい。

大学院実習での性の臨床教育

臨床心理学専修の院生は、附属の心理臨床センターにおいて指導を受けながらケースを担当する。性に関する相談は、数は少ないながらもある。私が院生時代に欲しかった教育体制が少しずつ構築されるようになってきた。

「臨床心理学特論B」で性的指向のテーマが割り当てたり、「調べていくうちに、どんどん興味がわいた」

と言ってくれた院生は、その後、実際に性的指向がテーマとなるクライアントを担当することになる。附属の心理臨床センターにそれを主訴にした人が来たからだ。この院生が実に丁寧に誠実に、そして繊細に相手に向き合うカウンセリング経過を筆者はスーパーヴァイザーとして見守った。「知識と意識を根付かせ、理論と実践を両立させて学ぶ場」になり得たのではないかと思う。このケースは、クライアントの承諾を得てその後学内の事例論文としてまとめられ、東京武蔵野病院の精神科医である林直樹氏にコメントを寄せていただいた。

そのコメント中に、「このような複雑で多面的な捉え方が必要となるケースを、いろいろと悩みながらも正面から取り組もうという姿勢がこちらにもよく伝わってくる。その姿勢こそ心理臨床で最も大切なものであることは言うまでもない。すでにそれが備わっていることに敬意を表しておきたい」、「私は、性的な話をもっと診察やカウンセリングで話題になっていいと思うし、そのような話題をやり取りすることにセラピストももっと慣れる必要があると思う。きちんと相手のセクシュアリティを把握していくには、避けて通れないところである」という文章があり、紙上がまた教育的な場となったとも思った。

今年度も、授業で性依存を担当した院生が、そうした主訴を持つクライアントを担当しているものの、ほとんどの院生たちはこうした経験を積んではない。また、ジェンダーやセクシュアリティを主訴としているから、性の臨床ということでもない。語られなくても性がテーマであることは、カウンセリングではよくあることだからだ。理論と実践の両輪とはどういうことを指すのだろうか？その難しさを感じている。

また、筆者は10年ほど前、子どもの性別違和を学ぶために、トロントへ行った(詳しくは、2012年No.12の現代性教育研究ジャーナル「子どもの性同一性障害の研究と臨床—トロント留学記—」^{*1}参照)。ここまでのシステムを作ることは難しいものの、小児の性別違和のケースが入り始め、その断片だけでも体制を取れるような状況が少しずつ立ち上がってきている。現在コロナ禍ゆえにサービスを停止している「にじっこ(LGBTかもしれない15歳以下の子どもと家族のための会)」^{*2}も、心理臨床センターの事業として走っている。これらは、ジェンダーやセクシュアリティが主

訴のケースの場として、大切に育てていきたい。

学部における性の臨床教育

さて、ここまで大学院教育について紙幅を割いてきたが、さらなる問題は学部生である。石丸（2018）^{※2}は、日本性科学会のシンポジウムで、学部3年生の臨床心理学の授業でセックスレスやセックス・セラピーについてのビデオを視聴してもらった際、「まだセックスをしたことがないので、その先のいろいろな悩みを聞かされても、どこか遠い世界のことのようを感じる」という一部の男子の反応があったと報告した。

筆者も、非常勤先の教員養成課程の学部生の授業で性の多様性について話すと、「遠い感じ」や「他人事感」、さらには「嫌悪感」を正直に述べてくれる学生が時々いる。筆者が接する学部生たちのほとんどが教職や対人援助職に就かず、一般就職をすることを考えると、性に関する専門的な知識や思考はどこまで必要なのだろうか。共感的に理解するという臨床心理学的な学びに繋げなくてよいのか、甚だ悩ましい。

おわりに

大学院の授業では、まず初めに「価値自由の性教育（山中，1987）」^{※3}を読んでもらう。「実際の性教育（性にかかわる生活指導も含めて）においては、性は常に自分の性を自覚しない人々によって特定の方向に価値づけられる形で取り扱われてきた」という山中の文章は、今から30年以上も前に書かれたものだが、一切色褪せない。

筆者が性の臨床に関して専門職教育が必要だと思うのは、心理職が「自覚なく」対応しがちなテーマではないかと危惧をするためである。それは自戒も込めてそう思う。

たとえば「不登校」であれば、臨床心理士にとっては、とてもなじみのある現象であり、ほとんどの心理士／師が「学校へ通うこと」への価値観を自問自答し

た経験があるだろう。そして当事者の気持ちに寄り添い接していくことにおそらくブレはない。一方、性については自らの価値観を深く考える機会に恵まれるとは限らない。すると「当事者の気持ちに寄り添う」ことがなおざりになることがあるのである。心理士／師の性の価値観と異なるクライアントをjudge（審判）したり、カウンセリングでクライアントがさまざまに困りごとを述べている中で、ふと性に関することを漏らしても、それについてはそれきりになってしまったり。これは、心理士／師がセクシュアリティを扱えずクライアントの心情を“スルー”してしまった状況といえる。回避をしたり、審判を下しがちなこのテーマについて、「養成機関の教育で扱う」ことが必要ではないかと思うのである。

最後になるが、筆者のゼミでは3年生・4年生・大学院生がそれぞれ自身のテーマについて卒業論文と修士論文を仕上げるべく、鋭意努力している。現在2名いる院生は、「ポジティブ心理学から見た同性愛／両性愛」、そして「性的マゾヒズム／性的サディズムにおける性的同意」という、いずれも重要な内容に取り組んでいる。こうした研究が今後論文という形で誰もがアクセスできるようになることで、ジェンダーとセクシュアリティの理解の底上げになることを期待するばかりである。

【引用文献】

- 注1 杉山正子（2019）第38回「日本性科学会学術集会」会長講演記録 大学教育に「性科学」はどのように取り入れられているか、日本性科学会雑誌，37（1），3-11.
- 注2 石丸径一郎（2018）心理系学部・専攻における教育の実態と今後の展望，シンポジウムⅡ「大学教育に「性科学」はどのように取り入れられているか」第38回日本性科学会学術集会，中日パレス，2018年9月23日
- 注3 山中京子（1987）価値自由の性教育，少年補導，376，14-21.

※1 https://www.jase.faje.or.jp/jigyo/journal/seikyoiku_journal_201203.pdf

※2 <https://245family.jimdofree.com/>

※1



※2



〈日本性教育協会創立 50 周年記念・特別寄稿⑤〉

国際学会と日本性教育協会（JASE）

日本性科学会理事

国立病院機構千葉医療センター非常勤(婦人科医師) 大川 玲子

はじめに

日本性教育協会（以下、JASE）の季刊『現代性教育研究』VOL.1 を手に取ったことを懐かしく思い出す。1972 年の私は医師になったばかりで、女性のセクシュアリティ支援をしたいと産婦人科医になったものの、手がかり無しの状態だった。日本性教育協会が設立され機関誌が出たことを新聞で知り、性教育運動への期待を持って購入した。立派な冊子であった。

性教育を含むセクシュアリティ、そして女性運動には、常に抑圧がかかる。活動が現れ、政治が動くにはそれなりの理由がある。JASE が設立された 1970 年代に、日本性科学会（JSSS）の前身 JASCT（日本セックス・カウンセラー・セラピスト協会）も発足した。世界的に黒人、女性、反戦運動など人権運動が盛り上がった時期である。1990 年代に性教育が活発になったのは、HIV 感染の脅威からである。その後は長い「性教育バッシング」の時代が続いた。JASE はこの 50 年、追い風も向かい風もあったが、私たち性科学者、性教育者のよりどころの一つとして、着実に歩を進めてきた。

性の健康世界学会（WAS : World Association for Sexual Health）とともに

JASE は朝山新一氏らによって、WAS の設立（1974）にも関わり、以来、事業の一つとして国際学会活動に寄与してきた。

WAS は World Association of Medical Sexology として、パリで第 1 回大会を開催。以後 2 年ごとに各

地で国際大会を開催して来た。1978 年ローマ大会で名称を World Association for Sexology と変更、さらに 2005 年には現行の World Association for Sexual Health となったが、愛称の WAS を踏襲している。

メンバーは国ではなく、性科学に関わる団体（正）会員と個人会員とで構成する学際組織である。巨大な組織ではないが、人間の性についてポジティブに、山積する現実課題に取り組み、オピニオンリーダーとして全ての人々の性の健康を推進するというスタンスは揺るぎない。

私が 2 度目に JASE と出会い、以後密接な関係を持つきっかけは、1995 年横浜開催の第 12 回世界性科学会（the 12th World congress for Sexology, 12th WAS）である。

12th WAS は、日本産婦人科学会の重鎮でもあり、性科学を推進する多数の団体代表でもあった松本清一氏を会長に、性科学に関わる 5 団体が共催して開催した。当時 JSSS の幹事として裏方の一人として働いた私には、初めての国際会議であり、学術講演の多彩さ、華やかな公式行事などに圧倒された。国内開催とはいえ、後に各国の大会に参加した経験からも世界に恥じない国際会議だったと思う。

1997 年以降の WAS と WAS 大会

横浜大会以降の学会大会の全てに私は参加してきたが、1997 年第 13 回バレンシア（スペイン）大会は私にとって特筆すべき大会であった。4 年ごとの役員選挙で advisory committee の一員に選出されたのである。未経験の私が選出されたわけが二つある。前回の

横浜大会総会で男女平等の主張が通り、役員の男女比率が6:4を超えないという規定ができた。女性が当選するチャンスが高くなったのである。さらに日本の参加者による熱心な選挙運動があった。一方選挙戦の過熱と、日本から2名の委員選出という戦略がたたり、以前からの委員で知名度の高い波多野義郎氏がまさかの落選という事態が起こった。

心細い私を心配した波多野氏は、学会後の観光ツアーを辞退して新委員会出席に付き添って下さり、学会情報その他実りあるご指導をいただくことができた。この大会では初めて女性会長を務めた Maria Perez-Conchillo は、2019 年メキシコ大会で、私とともに Gold Medal を受賞した。

次の 1999 年香港大会で、WAS は「性の権利宣言」(Declaration of Sexual Rights) を採択した。また日本から石浜淳美氏が Gold Medal を受賞した(本紙 No105*で私が執筆した「WAS のこれまでと Gold Medal 受賞」で、歴代日本人受賞者として石浜氏の記述が漏れたことをお詫びします)。

2001 年のパリ大会は ISSM (International Society for Sexual Medicine) 国際性機能学会とのジョイントで、3000 人という多数の参加者を集めた。New Millennium という時期でもあり、またバイアグラが世に出たため学会へのスポンサーがついた画期的な大会であった。

2003 年はハバナ大会で、国際的な位置が微妙なキューバへの参加は楽しくも刺激的であった。この年奇しくもカストロ大統領が日本を訪問した。大会会長 Mariela Castro は大統領の姪にあたる。

2005 年モンテリオール(カナダ)大会では WAS の名称変更が行われた。Sexology と Sexual Health の守備範囲は変わらないが、学際組織であると同時に運動体としての WAS の立場を明確にし、WHO と路線を合わせた名称変更と言える。

湾岸戦争に次いでイラク戦争(2003~2010)が始まっており、性科学、性教育には逆風が吹いていた時代である。米国では政府によって、宗教色の強い「結婚まで純潔のみを是とする」性教育が推奨された。日本でも宗教によってではないが、学校性教育が「過激な性教育」としてバッシングされるようになった。WAS も JASE も強い攻撃を避けつつ「包括的性教育」を守り進めることが課題となった。逆風とはいえ、

WAS が学術主体から、あくまでもエビデンスに沿った発言、行動する団体として活動方向をシフトさせるきっかけになったとも言える。

同時に、WAS の目標として性の健康を推進するための課題を「モンテリオール宣言」(Millennium Declaration for Sexual Health) として発表した(公表は 2008 年)。

2007 年シドニー(オーストラリア)大会からは、大会の財政面を国際学会企業に託すことになった。そのため開催都市選択、会場、運営の経済的側面の全てに会社の意向が強く反映することになった。大会規模が大きくなるにつれ国際学会開催の財政負担が大きくなったためである。

参加者にとっても高負担で、参加費の発展途上国枠などを設けるようになったものの、旧来の大会のあり方にも疑問が出始めている。これについては COVID-19(新型コロナウイルス感染症)の地球規模での感染拡大が、様々な催しのリモート開催を余儀なくし、スキルアップもしている今日、一つの解決策を見出しているとも言える。

2009 年のヨーテボリ(スウェーデン)大会で、私は advisory board を辞退した。選挙なので私の後任とは言えないが、日本からは大阪府立大学の東優子氏がその後当選を続けて今日に至っている。英語による会議にいつも頭を悩ましていた私と違って、東氏は英語・日本語のバイリンガルであり、優れた性科学者／アクティビストでもあり、この役割にふさわしい。WAS でも性の権利委員(一時は委員長)を務める活躍ぶりである。その後の大会にも私は参加しているが、日本からの参加者は大変多く、若い参加者も増えており世界からの期待は大きい。

ともあれ 10 年間 WAS に揉まれた私は、国際学会あるいは団体のあり方を WAS から多く学んだ。advisory board の選任も男女平等だけでなく、一国に偏らず、5 大陸から公平に選出と言ったアファーマティブ・アクションを敷いた。その結果、一時は「能力が低くても女なら」という陰口も聞かれたが、WAS の運営には支障がないどころか、女性の声を実現するため方針はいっそうリベラルになっている。

2011 年グラスゴー(UK)、2013 年ポートアレグレ(ブラジル)、2015 年シンガポール、2017 年ブラハ(チェコ)、2019 年メキシコシティ(メキシコ)、と紆余

曲折はあるものの、途切れなく大会は継承され、今年2021年、WAS大会は初めてアフリカ大陸はケープタウン（南アフリカ）に行くことになる。

メキシコ大会で発表された最新の宣言書は、「性の喜び宣言」(Declaration on Sexual Pleasure)である。性の権利、性の健康宣言については、本誌 No105にも詳しく書いたが、性の喜びの宣言書を含め、WASホームページのほか、JASEのホームページからも迎れるので、ぜひお読みいただきたい。

アジア・オセアニア性科学連合

(Asia-Oceania Federation of Sexology, AOFS)

JASEがかかわってきた、セクシュアリティに関するもう一つの国際性科学会がAOFSである。1990年に香港大学のEmil Man Lun Ngが開催したConference on Sexuality in Asiaをきっかけに、日本、中国、台湾、韓国、インド、シンガポール、タイからの参加者らが結成したのがアジア性科学連合(Asia Federation of Sexology, AFS)。以下、大会名でなく組織名)であった。WASとは独自に設立したが、WAS大会開催の間の年にやはり隔年でアジア性科学会を開催している。

2002年にWASの提案で、オーストラリアなどオセアニアを含めた組織AOFSとなり、ヨーロッパ(EFS)、アフリカ(AFSHR)、ラテンアメリカ(FLASSES)、北アメリカ(NAFSO)とともにWASの地域組織となった。WASに比べるとゆるい連合体で、メンバーも必ずしもWAS会員と同一ではない。

実際に私が参加したのは1998年の第5回ソウル(韓国)大会からである。次回の日本大会の準備のため、多数の参加であった。

2000年の第6回大会は、12thWASと同じ松本清一氏を会長に神戸のポートピアで開催した。私はこの大会では12thWASを担った波多野義郎氏、宮原忍氏とともに副会長を務めた。香港のNg氏ほか、アジアの主だった性科学者はもちろん、WASのColeman会長、翌年のWAS大会会長でのちにWAS会長も務めたフランスのGanem、後にWASで初めて女性の会長となったオーストラリアのCoatesなどのゲストスピーカーをお招きし、少なくとも見かけは阪神淡路大震災から復興を遂げた神戸市内を楽しむこともできた。

組織名がAOFSとなった2002年シンガポール大会

から、2004年ムンバイ(インド)、2006年バンコク(タイ)、2008年北京(中国)、2010年バリ(インドネシア)と順調に進み、2012年12回大会は松江(日本)とほぼメンバー国を一巡した。

松江大会は私が会長を務め、日本性科学会名誉理事長の野末源一氏と、神戸大会の副会長、波多野氏、宮原氏という長老に、副会長として叱咤激励とサポートをいただいた。また事務局長は12thWAS、6thACS(Asia-Oceania Congress of Sexology、このみ大会名)に続き、元JASE事務局長の島崎継雄氏が獅子奮迅の活動をしてくださった。全国性教育研究大会の共催など、多くの方のご支援で、性科学の課題をほぼ網羅する集会となった。

その後は2014年ブリスベン(オーストラリア)、2016年釜山(韓国)、2018年チェンナイ(インド)と順調にバトンタッチしたが、第16回大会の開催地が決まらず、またCovid-19禍とも重なって今後の活動は模索中である。

アジアという地域活動が重要なことは論を待たないが、国柄もセクシュアリティへのスタンスも、「世界」に比べて「違い」をより強く感じるのが地域活動である。オーストラリア、ニュージーランドの文化はより欧米に近い。

参加国もアジアの一部であり、非参加国の多くは発展途上国である。だからこそ大会を継続し、ゆるい絆を継続する必要がある。

JFSについて

12thWASを開催した5団体がその後も結束して、セクシュアリティに関わる活動と世界と繋がる入り口として結成したのが、日本性科学連合Japan Federation of Sexology(JFS)である。国内開催のWAS、AOFSの基盤でもある。この絆もCovid-19の影響で休眠中であるが、雌伏中と考えている。

時はコロナ時代。世界規模の命の脅威にさらされ、人権が軽視されかねず、弱者がより攻撃され、性暴力も猛威をふるっている。だからこそ、私たちは世界と手を結び、一人一人の人権、性の権利、性の喜びを推進する努力を続けていきたい。

※https://www.jase.faje.or.jp/jigyoyournal/seikyoku_journal_201912.pdf

「ありのままのわたしを生きる」ために

その後

第5回

「等身大でいい」

土肥いつき

京都の公立高校教員。24 時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

わたしは教員生活の3分の2を人権教育担当をしてきました。担任時代も学年の人権教育担当をしていたので、教員生活＝人権教育と言っても過言ではありません。「しんどい子」の担任をしたり、交流会をするだけでなく、人権教育推進の裏方ともいえるさまざまな事務仕事もしてきました。おかげさまで、事務処理能力はずいぶん鍛えられました。いつしかそうした仕事の人から評価されるようになりました。しかし、人から評価されるようになるにつれ、わたしの存在価値は実践や事務仕事であって、「実践や事務仕事抜きの『単なるいつき』には価値がない」と感じはじめました。だからこそ、実践や事務仕事をがんばりました。すると、それが評価されます。その評価は、わたしにとってのプライドであると同時に、「単なるいつき」の無価値さをわたしにつきつけるものでした。

そんなわたしにひとつの転機がありました。

わたしは2010年にSRSを受けましたが、いろいろ不満が出てきて、2015年3月に再手術を決めました。今回は前回とは違うN病院に行くことにしました。他人が手術したあとの修正術のめんどくさは、素人のわたしでもわかりますが、Yさんは快く引き受けてくださいました。そして、7月に再手術を受けました。

手術のあとの休みは2日だけ。そこには「修正術だから、たいしたことはないだろう」という勝手な思い込みがありました。ただ、3日目に職場に行くと、さすがに「『安静』とは寝ることなんだ」ということがわかりました。が、2日もすると身体も慣れてきて、ふだんどおりの生活をはじめました。

手術の2週間後に、トランスジェンダー生徒交流会のキャンプがありました。みんなと一緒に肉を食べビールを飲み、楽しい2日間を過ごしました。帰り道、おみやげを買いに寄ったお店でトイレを借り、便器に座った次の瞬間、プツンという音が聞こえました。あれ？と思って下を見ると、すごい出血です。しかも、タラタラと流れていて、止まる気配がありません。

外に出ると卒業生たちがいて、大騒ぎになりました。

それでもとにかく、京都市に向うことにしました。ところが、出血が止まりません。患部は見えませんが、確実に出血し続けているのがわかります。途中で「これは限界だな」と思って、救急車を呼ぶことにしました。119の電話を終えて、ふと下を見ると、血の池が見えました。その瞬間、気絶したようです。次の記憶は救急車のサイレンでした。「助かった」と思いました。そのまま救急搬送されました。病院の処置室から出ると、卒業生たちがずっと待っていてくれました。みんなとこぶしをあわせながら「生きて帰るよ」と言い、ICUに運ばれました。わたしの入院の知らせを聞いたYさんは、わざわざ名古屋から来てくださり、すぐに再々手術の段取りを組んでくださいました。

救急隊員の話によると、約1リットルの出血だったとのことでした。京都市内までがんばってたら、死んでいた可能性があります。今にして思うと、出血の原因は1週間前のことでした。急ぎの用事のためにキックボードで移動中、地面を蹴った瞬間、患部がプツンといった気がしました。おそらく、くっつきかかっていた患部が開いてしまったのでしょう。わたしの無謀さであるにもかかわらず、Yさんはすべてを自分の責任として処理してくださいました。

入院して3日目、ICUから一般病棟に移りました。ICUでONにしていた機内モードをOFFにした瞬間、大量のメールがなだれ込んできました。ほとんどはどこかで事態を知って心配のメールでした。「生きてくれてよかった」「まだ死なれたら困る」「まだまだ聞きたい話がある」、とてもうれしいメールでした。それから1週間ほどしたある日、Facebookを見てみると、いつも辛辣なコメントをされる友だちが「いつきは生きているだけで意味がある」という投稿をしてくださっていました。その時「単なるいつきにも価値があったんだ」と思いました。

大量出血のできごとを通して、自分はたくさんの人に支えられてきたことがわかったとともに、だからこそ等身大の自分でいいと思えるようになりました。

思いこみの めがね

シゲセンセーのポジティブライフ

鈴木茂義 Suzuki Shigeyoshi



公立小学校非常勤講師。14年間の公立小学校正規教諭、主任教諭を経験。
専門は特別支援教育、教育相談、教育カウンセリングなど。

2021年になりました。みなさん、どのような新年をお迎えでしょうか。このコラムが公開される頃には冬休みが明け、私はきっと勤務先の学校で忙しく過ごしていると思います。コロナウィルスの感染拡大も、少しは収まっていることを願うばかりです。

2020年、個人的に印象的だったことの一つに、同性パートナーシップの制度が一層全国に広まったことが挙げられます。2015年に東京都渋谷区・世田谷区でそれが始まったときは驚きました。その当時、私にはパートナーがいまいませんでしたが、目の前がパーッと開けた感じがしたのを覚えています。同性のパートナーに対する社会のまなざしが、一歩前進するだろうなと思った瞬間でした。

とは言え、自分がこの制度を利用するかどうかというと、それはそれで考えないといけないなと思っています。自分一人の問題ではなくなるし、自分のパートナーとも相談が必要になります。なにしろ今まで「誰かと公的にパートナーシップを結ぶ」ということを、自分の人生の可能性から削除していましたから。これまで気づいていませんでしたが、それは悲しいことだったと思います。そして今、住んでいる自治体によっては、パートナーシップが結べるかもしれない。その可能性が目の前に表れたとき、人生で初めて真剣に考えるようになりそうです。

同じように今までパートナーシップ制度に関心がなかったゲイの友人カップルも、最近の動向をきっかけに自分事になりつつあるようです。目の前にある選択肢。さて、使うか使わないか。

先日、仲の良い友人（A君）と食事に出かけました。10年来のゲイの友人で、たまに会っては互いの近況報告をしています。同じ年ということもあり、安心して話ができる友人の一人です。仕事や趣味の話をしていると、あっという間に時間が過ぎます。「お互いにおじさんになったなあ」「30代に戻りたい！」「いや、40代の今の方が楽しい」と話していました。

会うとだいたいこのような感じ（笑）。でも毎回、同じようにこのような話をして何だかホッとするので。僕たちには法的な結婚はありません。子どもを育てるという機会も、大多数のゲイはもつことができません。だからこそ、周りの友人がどう過ごしているのかを確かめる必要があるのかもしれません。

その日は、パートナーシップ制度を利用するかしないかという話にもなりました。私が「A君はパートナーシップの制度ができたなら、使う？」と聞きました。するとA君は「俺はそういうの使わないかなあ」と静かに答えました。そして続けて「ほら、俺、周りの目が気になっちゃうんだよね」と優しく微笑みながら話してくれました。微笑んでいるのだけれど、そこにはちょっとした寂しさとやるせなさが感じられました。私はなんだか、胸がキュッととなりました。パート

ナーシップ制度の導入が全国で進んでいるとはいえ、社会的な抑圧をまだまだぬぐい切れていないなあ。周りの視線やこれまでの体験が、影響しているなあと思いました。もし

しかしたら、A君や僕の心が、パートナーシップ制度の導入のスピードに追いついていないのかもしれない。できた制度をどう使うのか、使わないのか。自分はこの先、何を望んで何を望まないのか。制度の広がりと同時に、そういったことを考えていく2021年になりそうです。

2020年9月30日現在、全国パートナーシップ制度の交付件数は1301組だそうです（全国パートナーシップ制度共同調査）*。現在は人口カバー率も30%を超えていて、都道府県単位での制度導入も一層進む可能性があります。また、都市間連携の推進も模索が続いています。「パートナーありき」「制度利用ありき」ではないことを再度確認しながら、今年の動向を見守っていきます。もちろん行動も！

今年もいろいろな方と、お話しする機会に恵まれることを祈りつつ。このコラムの感想もお待ちしております。

* <https://www.city.shibuya.tokyo.jp/kusei/shisaku/lgbt/kyodochosa.html>

第34回

「周りの目が気になっちゃうんだよね」 親友とのやりとりから



多様な性 のゆくえ

One side/No side [45]

「ギャグ」はもう終わりにしたい

米国の大統領就任式は1月20日に予定されている。選挙は昨年11月3日が投票日だったので、その時を起点にすると78日後に新政権が発足することになる。この時間差は米国の政権移行期には常にあるものなのだが、今回は選挙後の展開が異例づくめだった。その理由は制度的な問題というよりもむしろ、ドナルド・トランプ大統領のキャラクターに起因するものだろう。次期大統領のジョー・バイデン氏と女性では初となるタマラ・ハリス次期副大統領は投票4日後の11月7日にバイデン氏の地元デラウェア州ウィルミントンで勝利宣言を行っている。

ただし、共和党現職のトランプ大統領は敗北を認めようとはしなかった。

米国には新しい大統領が誕生して最初の100日間はメディアや野党も、政権批判を控える。それが暗黙の了解事項だった。

また、政権移行期には、大統領選の結果を受け、敗れた候補者が先に敗北を宣言し、それを待って、次期大統領が勝利宣言を行うという慣行もあった。ニュース報道の受け売りで恐縮だが、すぐに忘れてしまいそうなので、少しおさらいをしておこう。

米国の大統領選挙は11月の第1月曜日の翌日（つまり火曜日）に全米各州で選挙人を選ぶための一般投票が行われる。2020年の第1月曜日は11月2日だったので、投票日はその翌日の3日となった。

投開票から新大統領就任までの間には、2か月以上のタイムラグがある。次期政権の担当者が、相手候補の敗北宣言を待って勝利を宣言するのは、この間に政治的空白が生まれることを回避し、政権の移行を円滑に進めるための知恵だった。

その意味で、4年前の100日と同様、今回の最後の78日も異例の展開となった。超大国の指導者のキャラクターがこれほど世界を翻弄したことも珍しい。日本を含む各国指導者は、トランプ大統領の言動をよそに、次々とバイデン次期大統領と連絡をとり、祝意を表明した。浮足立った世界に何とか落ち着きを取り

戻したい。国際社会のそんな気持ちが伝わってくるような現象というべきだろう。

各国政府だけでなく、国連合同エイズ計画（UNAIDS）も11月10日に「バイデン次期大統領、ハリス次期副大統領の選挙結果を祝福する」というプレス声明を発表している。各国の政治指導者とは異なり、国連機関の立場は微妙である。その中で、UNAIDSが真っ先に歓迎の意を表したのはどうしてだろうか。少し話がそれるが、当コラムが始まったのはトランプ政権発足から3か月後の2017年4月であり、第1回のタイトルは《米トランプ政権の笑えないギャグ》だった。もちろん、UNAIDSのプレス声明に「ギャグはもう終わりにしたい」などといったことが書かれているわけではまったくない。それでも個人的にはいついそんな深読みがしたくなってくる。

コラムで取り上げたギャグはお笑い系のネタではなく、1980年代のロナルド・レーガン大統領以来、共和党政権が代々、採用してきた「グローバル・ギャグ・ルール（世界口封じ令）」のギャグ（口封じ）だった。一言で説明すれば、海外の非政府組織（NGO）に資金援助をする場合には、「その資金で家族計画の方法として中絶を促進するような活動はしません」との誓約を求め、活動に一定の制約をかけるルールである。

トランプ大統領は就任すると直ちにこのルールを拡大し、家族計画に関わる援助だけでなく、他の保健分野の支援にも適用する方針を打ち出した。

エイズの流行が深刻な途上国にとってその打撃は大きく、HIV／エイズ関係の国際会議では拡大版ギャグルールのために「性と生殖に関する健康サービスとHIVサービスを統合したかたちで提供することが困難になり、プログラムの縮小に追い込まれた」といった報告が相次いだ。UNAIDSがいち早く新政権への期待を表明した背景にはおそらく、そうした事情もある。抜け道を探すようにしてプログラムの存続をはかってきたところでも、コロナに加え、さらにあと4年もギャグが続くようでは到底、持ちこたえられないからだ。

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

AV 業界から見える社会のしくみ

「女性に向けて『AV 女優になるということ』を包みかくさず伝える書籍にしたい」という著者の思いの通り、AV（アダルトビデオ）制作の実態と AV 女優の現実を知ることができる一冊。新聞記者を経て、2014 年に AV 女優としてデビューした彼女は、4 年間あまりで約 750 本の作品に出演したという。業界側に配慮せずにすむフリーの立場だからこそ書ける内容、そして何より当事者にしか伝えられない現場の雰囲気と冷静な分析。ポップな語り口ながら、ユーザー向けのリップサービスではなく、AV という仕事について解説した実用書である。

AV 女優といってもいろいろなカテゴリがあり、内容もギャラもさまざま。そもそも、どうやってその世界に入るのか、どのような契約で、仕事現場はどんな感じ？ 業界ではあたりまえのことも、詳しく説明されている。いわゆる“ギョーカイ”の情報は、「知らないの？」という上から目線で語られたり、「とるに足りないこと」と切り捨てられたりしやすいが、著者は「すべてのこと」を丁寧に伝えようとする。少しでも多くの情報を得ておくことが自分の身を守ることにつながるという著者の信念が感じられる。

「知らないの？」「わかってるよね？」という圧力は、業界側が主導権が握るためのものである。女子にはどんな選択肢があるのか、どれだけ交渉の余地があるのか。意に沿わない仕事に対して、どうやって闘えばいいのか。業界内部で暗黙のルールになっていることもしっかり確認しておかないと、どんどん断りにくい状況になると著者は言う。そのため、本書では AV 出演承諾書やギャラ明細も開示、作品販売等停止申請をした際の文面まで掲載する徹底ぶり。映像の二次利用料や日本ではまだ認められていないネット配信でのロ



AV について女子が 知っておくべき すべてのこと

澁谷果歩著
サイゾー
定価 1500 円＋税

イヤリティについても言及され、もはや実用書のレベルを超えた労務管理マニュアルともいえそう。

また、「とるに足りないこと」「些末なこと」とみなされるような業界側のやり方が、巧みに女子を囲い込んでいく過程も見逃せない。飲み会やバーベキューパーティといったイベントで女優のプライベートに入り込み、関係者とのつながりや居場所を作っていく。親を批判して、業界側にとって都合のよい生活形態に誘い込むといった洗脳的な手法は、あからさまな暴力を用いていないだけに巧妙である。契約書の備考欄に「がんばります！」といったコメントを書くように求めて、出演強要をしていないという証明を作り出すこともある。こうした「あれ？」「ちょっとおかしい」という場面について、著者は一つ一つ立ち止まり、何が起きているのかを考えていく。AV 女優としての体験記のみならず、AV 業界のフィールドワークとしても読むことができる。

2016 年に社会問題となった AV 出演強要の問題についても、当時、現役だった著者が業界の動きや変化を詳しく記述している。AV 女優あるいは関心のある人にとって、具体的に役立つ内容だろう。

そのうえで、本書が「AV 女優になりたい女子」だけを対象にしているのではなく、広く「女子」に向けられているのは、ここで書かれていることが AV 業界に限った話ではなく、社会で起きていることにつながるからであろう。AV 女優への「お姫様扱い」とセクハラ、強要や搾取は、あらゆる業種でも無縁ではない。私生活や日常においても、一方的な性的願望を押しつけても構わない相手として「女子」が扱われることはめずらしくない。AV 業界や性産業だから性の健康や権利が守られないのではなく、性を消費する社会のありようが、性産業に従事する人や女性に対するまなざしや態度を形作っているのだ。

(大阪大学大学院准教授 野坂祐子)

▶▶ **3月28日 (日曜日) 10:00 ~ 12:00 オンライン開催** ◀◀

北東北性教育研修セミナー2021 東日本大震災から10年 災害とジェンダー・セクシュアリティ

震災から10年。災害とジェンダー・セクシュアリティを考えるうえで、LGBTIQの人たちが単なる「災害弱者」や「要配慮者」でなく、レジリエンスを持つ人たち、あるいは、防災や地域づくりの主体であることが伝わると考えて、期待してセミナーを開催します。

講師

杉浦郁子さん (和光大学)

「東北地方におけるセクシュアル・マイノリティ団体の活動実態調査」から見る LGBTQ コミュニティのこれまで / これから
山下 梓さん (岩手レインボーネットワーク、北東北性教育研修セミナー実行委員会)

被災直後からスタートした活動、10年の歩みとこれからについて

方法 オンライン (ZOOM を使用) ※詳細は申込者に直接連絡

参加費・問合せ先等

主催：北東北性教育研修セミナー実行委員会 **協賛**：日本性教育協会 (JASE)

参加費・北東北 (青森、秋田、岩手) 在住の方 無料
・北東北以外に在住の方 1,000 円

申込み：<https://peatix.com/event/1775980/view>



▶▶ **2月7日 (日曜日) 10:00 ~ 17:00 オンライン開催** ◀◀

第14回日本性科学会近畿地区研修会 新たなメディアで、みずから伝える

◆プログラム◆

10:10 ~ 11:00 アフリカ貧困村の産婦人科事情～漫談風レクチャー 藤田由布 (大阪なんばクリニック)

11:00 ~ 12:00 僕という性 岡 笑叶

13:00 ~ 16:55 一歩踏み込んだジェンダー医療について

13:00 ~ 13:50 ガイドラインに沿ったジェンダー医療の具体的方法

～意見書フォーマット・身体治療適応判定会議 Web 化のころみ～ (仮) 堀 貴晴 (新淡路病院)

13:50 ~ 14:40 望まれる医療機関の対応と身体治療医の心構え 丹羽幸司 (ナグモクリニック大阪)

15:00 ~ 15:50 ホルモン療法の効果に対する心理的評価 織田裕行 (関西医科大学)

15:50 ~ 16:40 性別に違和感を持つ子どもたちがトランスするということ ～医療とのかかわり～ 康 純 (大阪医科大学)

問合せ先等

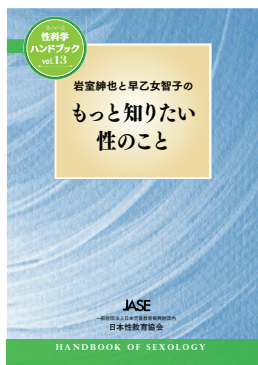
〈主催〉日本性科学会 〈後援〉NPO 法人関西GIC ネットワーク

〈問合せ先〉06-6346-0569 または jssskinki@gmail.com

〈参加申込〉<https://forms.gle/gPhXWj9RjnWsKrbW7>

詳細は、<http://www.osccp.jp/images/> 日本性科学 20210207.pdf





性科学ハンドブック Vol.13

好評発売中！

岩室紳也と早乙女智子の もっと知りたい性のこと

岩室紳也・早乙女智子著

◆A 5 判：138 頁 頒価700 円

『現代性教育研究ジャーナル』2014 年 4 月号～2017 年 3 月号に連載した「もっと知りたい女子の性／もっと知りたい男子の性」に、加筆・訂正して再構成したものです。

主な内容

- part 1 多様な性／「性」を科学する難しさ／女は女として生まれない／性別違和／ジェンダーバイアス・ジェンダーギャップ ほか
part 2 女性の性／膣VAGINAはくぼみである／女子もします！ マスターベーション／人工妊娠中絶と女性の身体権 ほか
part 3 男性の性／「包茎」を科学する／男子はおちんちんで育つ／「男」は環境で育つ性／男性の性機能って何？ ほか

著者プロフィール

岩室 紳也／泌尿器科医。ヘルスプロモーション推進センター（オフィスいわむろ）代表。AIDS 文化フォーラム in 横浜運営委員。
早乙女智子／産婦人科医。公益財団法人ルイ・パストゥール医学研究センター研究員、日本性科学会副理事長。セックスセラピスト。

既刊〈性科学ハンドブック〉

☆性科学ハンドブック Vol.11『思春期の性衝動～男の子の性を考える～』A5 判・78 頁 400 円

☆性科学ハンドブック Vol.12『腐女子文化のセクシュアリティ』A5 判・96 頁 500 円

※送料等は、ホームページを参照してください。

◆JASE ホームページ <https://www.jase.faje.or.jp/pub/pub.html> からお申し込みいただけます。

または、Email info_jase@faje.or.jp

TEL 03-6801-9307 FAX 03-5800-0478



「青少年の性行動／日中比較研究」報告書 2019

30 年ぶりに刊行できた本書が、経年調査の比較を含めて、両国の青少年の
性意識・性行動の実態を把握できる唯一の報告書です。

編集／一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会（JASE）
「第 8 回青少年の性行動全国調査」委員会内日中比較小委員会
協力／日本青少年研究所・上海社会科学院社会科学研究所

今回の日本における調査に際して他国との比較研究を検討し、上海社会科学院
社会科学研究所の協力のもと、中国の青少年の性行動に関してほぼ同一の質
問用紙にて調査が実現しました。調査地点は、北京・上海・広州の 3 地域
であり、調査期間は 2017 年 10 月から 2018 年 3 月までで、調査対象者は中学
生・高校生・大学生合計約 5000 人です。

〈主な内容〉

- 序章 調査の概要
- 第 1 章 性行動
- 第 2 章 性イメージの日中比較
- 第 3 章 避妊行動の日中比較
- 第 4 章 中国の若者の性行動とその動機
- 第 5 章 性の情報源の日中比較
- 付表・中国の青少年の基礎集計表



頒価：1,000 円

B5 判102 ページ



すぐ授業に使える

性教育実践資料集

中学校改訂版

ロングセラー『性教育実践資料集〈中学校版〉』の改訂新版です。性教育の経験が浅い先生でも、すぐに計画立案・授業実践が行えるように、実践例をもとにした具体的な指導案と教材・教具を多数紹介しています。個別の指導事例や学校・地域社会での指導事例、現代の学校における性教育の考え方、進め方もよくわかります。

〈主な内容〉

- 第1章 中学校における性教育（性教育を実践するにあたって／性教育の目的と意義）
- 第2章 性教育の実践（性教育の現状と実践の課題／学習指導要領における性教育の取り扱い／性教育の指導体制／指導計画の作成／性教育実施上の留意点／家庭・地域との連携／中学校の性教育の今後に向けて）
- 第3章 指導事例（各学年における指導計画と指導の流れ／8つの1年生の指導事例／6つの2年生の指導事例／6つの3年生の指導事例／7つの個別指導事例／5つの組織の指導事例）
- 第4章 参考資料（性行動経験率／性的なことへの関心割合／自慰経験率／性的関心の経験割合の推移／性へのイメージ／性感染症報告数の推移／梅毒患者報告数の推移／HIV・エイズ感染者の動向／人工妊娠中絶実施率及び推移／用語解説）

すぐ授業に使える

性教育 実践資料集

中学校改訂版



本体 2,000 円＋税 B5 判・224 ページ

好評発売中！

編／一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会 発行／小学館

全国の書店にて、ご購入いただけます！